

洞町窯垣の小径

● 散策時は車に十分注意し、歩道を歩きましょう。
● 私有地への無断立入・写真撮影はやめましょう。

洞町の歴史

洞町は二つの山が迫った谷間の町であったことから、その山の斜面を利用して江戸時代以降に多くの登窯が築かれ、瀬戸の窯屋の集積地のひとつとなった。この洞町では、江戸時代中期には「馬の目皿」「石皿」、明治時代に入ってから「本業タイル」などの本業製品のベストセラ―が生み出された。今でもむかしの名残がある工場、陶芸作家の陶房などが点在しており「やきもの里」としてのたたずまいが感じられる町である。

また、平成12年には、都市景観形成重点地区に指定され、町並の保全が図られている。
※本業とは、瀬戸での陶器の呼称

洞町の歳時記

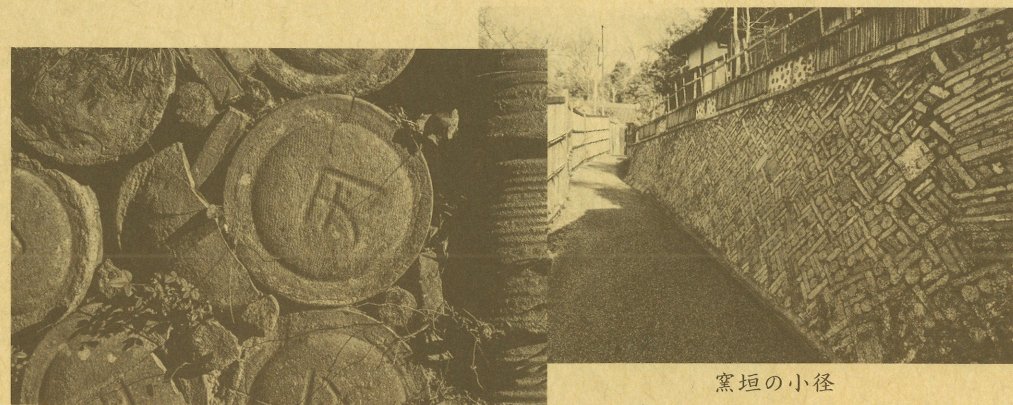
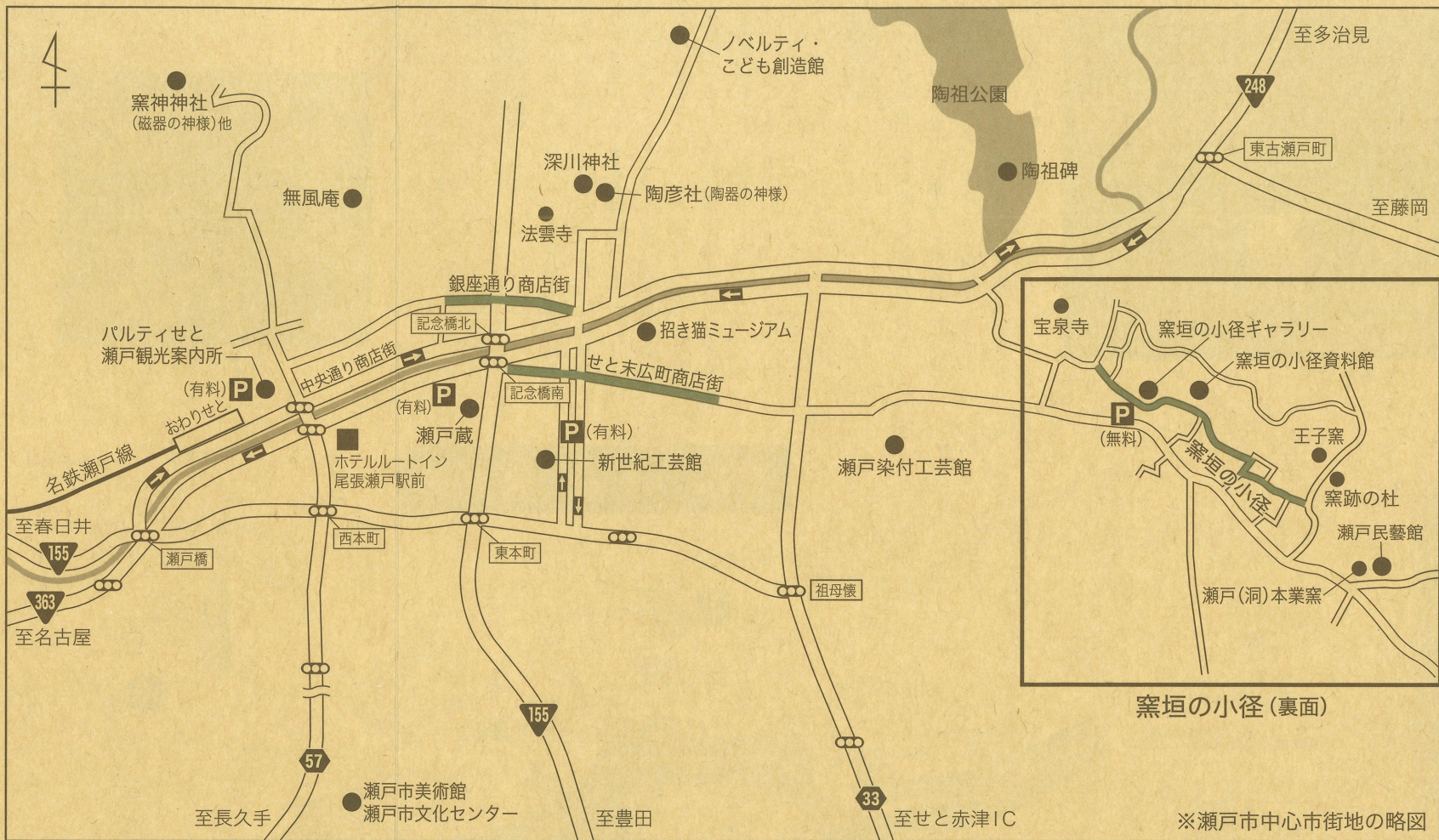
3月第1日曜日〈窯垣の小径まつり〉
7月第2日曜日〈弥蔵観音縁日〉
11月8日、12日〈宝泉寺薬師祭典〉
12月第1日曜日〈秋葉神社祭礼〉

棕の木

洞のあちらこちらに見られる棕の太木は固い材質で、その昔、製品を運ぶための天秤棒として利用するために植えられたものといわれている。

窯垣の小径

窯垣とは窯道具で作った塀や壁の総称で、洞町には新旧合わせてたくさん窯垣が残っている。国内でこうした風景が見られるのは瀬戸だけである。「窯垣の小径」とはこの窯垣が密集している場所をつなぐ延長約400mの細い路地で、その昔はこの小径がメインルートで窯元の屋敷が並び、陶工たちが往来したという。また、窯道具は、登窯を焼く時に製品を保護するため使ったエンゴロ(屑鉢)、タナイタ(エブタ)、ツクなどのことで、幾何学模様や自然釉の色合い、道具に印された窯屋の刻印などが歩くひとの目を楽しませてくれる。



窯垣の小径 (大エンゴロ)

陶祖碑

陶祖・藤四郎の偉業を称える六角形の陶製碑で慶応3年(1867)に完成。高さ約4m、六角の各面の幅約60cmで大小29個の陶器から成っている。



陶祖碑

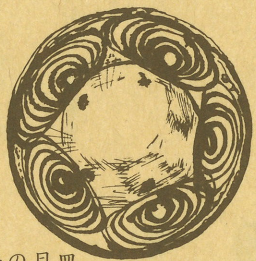
陶祖・藤四郎(加藤四郎左衛門景正)

鎌倉時代に僧道元に従い宋(中国)に渡り、陶業技法を学び帰国。瀬戸で良質の陶土を発見したことで窯を開き、瀬戸陶業の発展の礎を築いたとされている人物。毎年4月の第3日曜とその前日には藤四郎を偲ぶ「せと陶祖まつり」が行われる。瀬戸に多い「加藤姓」のルーツといわれている。

洞のベストセラ―製品

石皿・馬の目皿

江戸時代中期から大正期まで盛んに焼かれた洞を代表する焼き物。呉須と鉄で描かれた素朴な絵柄は民藝運動の指導者である柳宗悦らによって絶賛を受けた。また、洞ではこれらの皿のほかにも油皿、刷毛徳利、柳葉茶碗、染付茶碗、すり鉢、水がめなど生活に必要なやきもののほとんどがつくられていた。



馬の目皿
茶色の絵具で渦巻模様が描かれた皿

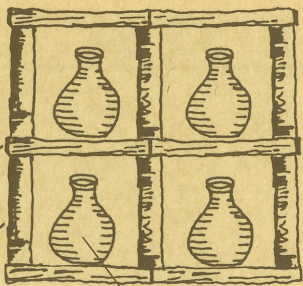


石皿
青色と茶色の2色の絵具で絵付けされた皿

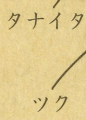


ムク(ニレ科)

登窯の製品の詰め方



製品

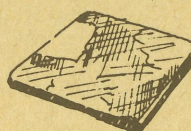


タナイタ

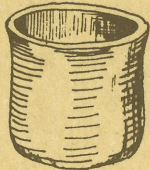


ツク

窯道具



タナイタ(エブタ)



エンゴロ

問い合わせ先
瀬戸市まるとミュージアム・観光協会

0561-85-2730

発行・令和7年5月



観光協会HP



散策絵図